日本行動計量学会
会報
第29号
1983年3月19日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

実証的国際比較研究に参加して

飽戸弘

昨年は、三月イタリーのベラージオ、六月から九月まではハワイと、いわば研究の渉外活動に追われて、本来の研究はまことにはかどらない不本意な一年でした。しかし、種々の研究プロジェクトに参加し、いろいろな研究者と議論ができ、有益なこともありました。

ベラージオ会議は、「地方政府の公共政策の国際比較研究」というプロジェクトで、数年前から、毎年一回、ヨーロッパかアメリカに集まって討議を重ねてきたものの最後のカンファレンスで、この研究グループの成果は近いうちに単行本としてまとめられることになっています。全体は五つのサブグループにわかれ、小生は〝公共政策の実証的検討〟グループに入り、日本の地方政府（市）の公共政策が、社会指標や政治指標からどの程度説明できるか、といった実証的研究を担当しています。

このグループは、イタリー、ベルギーで同様の研究を続けてきたミカエル・エイケン（ウィスコンシン大）、イギリスで同様の研究で著名なケネス・ニュートン（ダンンディ大）、かつて日本で優れた研究を行ったノーマン・グリックマン（ペンシルヴァニア大）など、そうそうたるメンバーで、とても楽しい研究グループです。

次に、ハワイのイースト・ウエスト・センターに滞在中、たまたま「地方政治と価値の国際比較研究」のカンファレンスが始まるというので、上述のプロジェクトとあまりに題目が似ているので、急拠参加させてもらいました。

こちらは、どちらかというと、地方政府の首長や住民の価値観について、世論調査データを収集し分析する、ということを目的としたプロジェクトでした。リーダーはフィリップ・ジェイコブ（ハワイ大）、サブリーダーがヘンリー・トゥーニーとトマス・ワットの両氏（共にペンシルヴァニア大）で、この三氏はすでにここ十年ほどいくつかの国際比較研究を手がけてきたチームで、それに、ポーランド、ユーゴスラビア、インド、タイ、韓国、シンガポール、香港、台湾など十二か国の研究者が加わって、共同利用できるデータバンクを作ろうという壮大な計画でした。

さて、ハワイでの本務のニューメディアの日米比較研究の方は、いくつかのサブプログラムより成っていて、その大部分は、文献研究とか、政策・制度の研究などですが、なかには、いくつか実証的研究も含まれています。

例えば、最近注目されている宇宙衛星の問題、とくに衛星を利用したテレビ番組の問題があります。ご存知のように、アメリカのある地域では、衛星利用のケーブル・テレビ（ＣＡＴＶ）によって、60チャンネルの受信が可能です。こうなると、朝から晩まで、ニュースをやっている局、スポーツ番組ばかり放送している局、音楽、それもロック・ミュージックばかり流している局などが現われ、テレビは何かということ自体が激変しようとしています。

そこで、テレビとそれ以外の新聞・雑誌の変質、またＣＡＴＶが日米でまったく違った使われ方をしているのはなぜか、といったことが問題となっています。これについて、今年はハワイでいくつかのカンファレンスをもって、日米の実証的研究者を呼んで討論を始めたいと計画しています。（日本行動計量学会理事・東京大学文学部助教授）

アーバインにて

印東太郎

早いもので、此処に移ってからもう三年。以前、訪問教授として滞在した二年をあわせると、もはや新参とはいえない。教授職にも段階があり、昨春、皆が推薦してくれたおかげで、私はその最上位に昇進した。心理学関係者の中でそのランクに達したのは、此処では私がはじめてだそうである。

Cal. State Univ.は沢山あるが、同じ州立にしても、研究により重点をおくUniv. of Californiaは、バークレイ、UCLAなど九つある。Irvineは設立後未だ十五年余、私は〝発展途上国〟と称している。事実、私が来てからも幾つか新しい建物が増えた。この間はMcGaughのひきいる神経生物学の実験棟が完成し、今はSocial Ecologyのビルが工事中である。

私は年間、大学院三、学部二の講義を担当し、昨年来、大学院では〝視空間の幾何学〟を三学期かけて、学部では〝色彩科学入門〟と〝人間の記憶〟を取上げている。

日本では間口を広げ過ぎたと反省しているので、今は主としてこれらの問題にしぼった。相当に立入った幾何学的論究を行っても、学生がついて来る（勿論、脱落する者もいるが）のは、理工系の背景をもつ学生やPost Doc.がいるからであろう。現在は、西独からと、生物物理学をおさめた中国本土からの若い二人の博士が参加している。訪問教授の時、同じ問題をやはり一年かけて取上げたら、同僚教授が二人ずっと聴講したのには驚いた。これではウカツなことは言えないと思ったが、学部の講義でも、毎学期、学生による評価が行われるので、やはりウカウカしていられない。この評価成績は昇進などの際モノをいうのである。

日本にいた頃とどこが違うかとよく質問を受ける。私は実感として、キメの細かい研究ができるようになったと思っている。他の研究者と直接意見を交わす機会が多いのと、思考を分散させずに集中し易いからであろう。今、Behavioral and Brain Sciences誌から依頼された問題提供論文〝視空間の幾何学〟を執筆中である。これを基調に多くの方が論争を交わすことになるが、こういう仕事に当っていると、特にそういう実感がわく。（日本行動計量学会理事・カリフォルニア大学教授）

運営委員会より

〝小グループ研究会の再発足のために〟

前回の理事会（次ページ上段参照）で、専門別の発展的な研究活動を活発にするため、小グループ研究会の復活が認められました。

この研究会の発足に際しての手続き事項に関する内規は、現在、運営委員会において、左記の事項を検討中で、四月の理事会で承認を得る予定です。

（小グループ研究会に関する内規（案）の骨子）

一、研究会発足を希望する会員は申請書を運営委員会に提出し承認を受ける。

申請書の内容は、(イ)研究会名、(ロ)代表者名、(ハ)研究会の連絡先（住所・電話・氏名）、(ニ)研究会発足に当っての趣意書（四百字綴二枚程度）

一、申請を受けた運営委員会は、速かに承認・不承認の判定を下し、その結果を代表者に連絡すると共に、承認した研究会の発足を会報で報告する。

一、承認された研究会に対しては、運営費として、年間若干額の連絡費（研究会案内のコピー代・郵送代等。金額は別途に定める）・会合時のお茶代等の補助をする。なお、他に研究活動に必要とする経費一切は研究会が負担する。また、研究会活動を常時会報で簡単に報告する。

一、研究会の期限は、原則として二か年を限度とするが、正当な延長理由の申請がなされれば、再判定の上、さらに二か年間の延長を承認することもある。

▼現在、鈴木達三氏（統数研）を代表者とする「社会調査技法研究会」が既に申請され、発足の承認が予定されています。

なお、この研究会の連絡先は、

（株）マーケティング・サービス
柳原良造　電話（〇三）三八三－二二七一　〒一六四　東京都中野区本町四－四四－一三（大同城西ビル）

会議議事録

○理事会（五七年十二月二〇日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　十一名

1. 昭和五十八年度初頭に行われる次期役員（理事・監事）選挙に向けて選挙管理委員会を発足させ、委員として池田央（立教大）、丸山久美子（盛岡大）、村上征勝（統数研）の三氏を決定した。

2. 松原欧文誌編集幹事長から編集は順調に進んでおり、№13を余裕をもって刊行できる旨報告があった。

3. 池田和文誌編集幹事長から10巻1号の原稿がほぼそろった旨報告があった。また和文誌表紙のデザイン変更は、討議の結果今回は見送ることとした。

4. 駒澤運営副委員長から「社会調査技法研究会」を小グループ研究会として認め、活動の内規を運営委員会で作成することになった旨報告があった。
　また、杉戸清樹氏（国語研）が運営委員として承認され、江川広報担当主査のあとを引継ぐこととなった。

5. 山本刊行物企画委員長より経過報告があり、将来計画について意見交換をした。

6. 木下理事から十一回大会実行委員会が発足した旨連絡があった（事務局報告）。

7. 柳井理事から組織検討の経過報告があった。その後討議に入り、広い視野からみて学会運営がより合理的になるという観点から組織の見直しをする点で合意をみた。水野理事が組織担当理事として承認された。

8. 古川研究事業担当理事から将来の事業計画のための討議資料が提出され、それにもとづいて意見交換をした。次回理事会までに各理事によびかけ具体案をもちよることとした。

◎会員数（三月八日現在）
（正）九三六人（準）一二九人
（賛助）三一法人

行動計量関西懇話会記録

○第二回〝時間データの解析〟
（世話人　生澤雅夫・大阪市立大学）
昭和五十七年十一月十三日、大阪市立大、参加者二十八名。

事務局から

◇例年、大会発表申込者の中に、若干ながらも非会員が含まれ、発表者として認められない場合が出ます。新年度をむかえ、あらたに入会を希望するお知合いもあると思います。
　入会希望者は、ハガキに住所・氏名を明記の上、日本学会事務センター（〒一一三東京都文京区弥生二－四－一六、日本学会事務センター日本行動計量学会係）へ、「入会申込書」を請求して下さい。電話での請求は不可。おりかえしセンターから「申込書」用紙が送付されます。
◇また、新年度は、会員各位にも住所・所属の変更や、準会員から正会員への変更が多くなります。
　これらの連絡も、必ずハガキで右と同じ日本学会事務センターの日本行動計量学会係あてにお願いします。本人氏名、会員番号、異動内容を十分かつ正確に記して下さい。電話連絡は不可。
◇これらの手続きの詳細は、本会報25号・26号に掲載されています。重要なことですので、今一度、ご確認下さい。

学会誌バックナンバー購入のご案内

ご希望の巻・号名、冊数、および送付先・氏名を明記し、代金と送料を左記あてに郵便振替でお送りください。

◆請求先：〒一五三
東京都目黒区駒場二－一九－一
大学入試センター研究部
岩坪　秀一

◆振替
番　号：東京八－一四八〇五六
加入者：日本行動計量学会

◇和文誌『行動計量学』
1巻1号（八百円）
2巻1・2号（各七百円）
3巻1・2号（各千円）
4巻1号（千五百円）
4巻2号、5巻1・2号（各千七百円）
6巻1号（千二百円）
6巻2号、7巻1・2号、8巻1・2号、9巻1・2号（各二千円）

◇欧文誌〝Behaviormetrika〟
№1～13（各二千円）

◆送料
一冊　二百四十円
三冊まで　三百五十円

「語彙の対照」

会員の声

高田　誠

国立国語研究所の報告書の中に『分類語彙表』というものがある。三万語余りの語が、意味の分類体系に従って配列されている。

我々のところでは、この語彙表の中から約六〇〇〇語を選んで、外国人の日本語学習者が中級程度の学習段階で習得すべき「学習基本語彙」を提示する作業を進めていて、近々出版する予定である。

一方、英、独、仏、西語などについても、「基本五〇〇〇語」と題する一連の辞書が白水社から出版されている。我々の六〇〇〇語とほぼ同じ目的で選ばれた語彙集と言えよう。

いずれも五、六千の語彙表であることから、これらをつき合わせることによって何らかの対照研究ができるのではないかと考え、準備作業を進めている。外国語の単語に与えられている日本語訳をキイとして、それぞれに、『分類語彙表』の番号を与え、外国語の単語をその番号に従って配列する。その結果、それぞれの意味分野に分配される単語の分布が言語ごとに示されるというわけである。

たとえば、番号三〇一の喜怒哀楽の項のうち、「悩み」のところでは、日本語では「悩み」一語、独語でもLeidenー語であるのに対して、スペイン語では、dolor, padecimiento, pena, penitencia, pesadumbre, sufrimiento, tormentoと、「悩み」という訳語の付いたものが七語採られている。仏語では逆に「悩み」という訳語の当てられた語はひとつもない。「スペイン人は大いに悩み、フランス人は悩まない。ドイツ人と日本人は同程度に悩む」といった乱暴な結論を引き出すつもりはないが、かなりの差があることは確かである。

同じ三〇一番に、「のんき、のんびり」の項があり、日本語では「楽」、「気楽」、「のんき」、「悠々」、「のんびり」といった語が採られている。これに対して、独語、西語ではこの五語に当たる語が全く採られてなく、仏語で、facile（楽な）一語が見られるだけである。働きバチとか仕事中毒とか言われる日本人とゆったりとしていると言われる西欧人との対比と比べて、語彙の好みが逆になっているのはどうしたことだろうなどと考えてしまう。

目下の作業は、ただ語を意味分類に従って分配しているだけである。公にするものも、多分、分布の姿だけになりそうである。量的に扱うのはどなたか興味をお持ちの方にお願いしたいものである。

（日本行動計量学会会員・国立国語研究所室長）

会報係からのお願い

◇本学会にはさまざまな専門分野の研究者が加入しています。会員の中には、自分と異なる分野での活動状況や研究動向を是非知りたいという声が以前から強くあります。これに応えるため、会報では会員各位の関係される各種学会の大会・研究発表会のスケジュールやそのつどの中心テーマなどについての情報をお待ちしています。

◇会報も次号で30号を数えることになりました。これを機会に、学会・会報の過去をふりかえって、また次の時代の会報を展望して、会員各位の「声」をお寄せ下さい。

◇右のご投稿は、〒一一五東京都北区西が丘3－9－14国立国語研究所　杉戸清樹あてお願いします。

"月例シンポジウム"へのご意見をお寄せください

本学会では、学会発足後現在まで、合計31回の「月例シンポジウム」を開催してきました。

このシンポジウムは、そのときおりの関心領域に合致するテーマについての討論を行い、そのテーマの推進を図るとともに、各人の考え方を相互に理解し合うことなどを目的としたものです。

これまでは、運営委員会の月例シンポジウム係が中心となり、他の会員諸氏のご意見を参考に、広くテーマを設定してきました。しかし、なお重要な課題が残されているように思われます。

今後の月例シンポジウムをより充実させるべく係一同努力を続けるつもりですが、会の運営・設定テーマなどについて会員諸氏のご意向をできるだけ反映したいと考えております。

つきましては、皆様のご意見・ご要望などを、身近な運営委員または左記宛に、どしどしお寄せください。

◆連絡先：〒一〇五　東京都港区芝愛宕町一－一〇　NHK放送世論調査所　杉山明子